留学生フォンの話

白水百合子

日本語学校での教え子、フォンはベトナム・ホーチミンから来た留学生だった。天真爛漫な性格のフォンは、七人兄弟の末っ子で、父親は居らず、服装店を営む母親と六人の兄によって育てられた。いつからかフォンは、日本に強いあこがれを抱き、高校卒業後は日本に留学したい、という夢を持った。その夢を知った兄たちは、フォンのためにベトナム公務員年収の十倍近くになる留学費用を捻出した。そうしてフォンは二〇一二年の春に、福岡の日本語学校へ入学した。

意気揚々と入学したものの、フォンはすぐにベトナムと日本の経済格差を痛感する。ホーチミンでは決して貧しい暮らしではなかったが、「円」と「ドン」では、その価値にはるかな開きがある。暮らしはすぐに行き詰まった。兄たちが捻出してくれたのは、一年間分の学費と、半年分の寮費のみ。次年度分の学費と寮を出た後の家賃は、自分で賄わなければならないし、生活費も必要だ。しかし、留学生のアルバイトは法に規制があり、週に二十八時間しかできない。どう計算しても、次年度の学費を賄うことは難しい。このままでは帰国するしかなくなる、とフォンはひどく落ち込んだ。

しかし、フォンはどうしても留学を諦めたくなかった。せっかく日本に来ることができたのだ。帰国するのは最後の手段。やれることは全部やってみよう、と開き直り、フォンは前を向いた。まずはアルバイト先の店長に相談してみた。

「店長、このままでは次年度の学費が払えません。同じ時間でも他の人の二倍以上働きますから、僕の時給を上げてください！」

そうストレートに店長にぶつけた。そして、まずは自分の働きを見て欲しい、と誰よりも全力疾走し、誰よりも全身全霊の姿勢で目の前の仕事に打ち込んだ。そうすると、その店長は、フォンを外国人全体のリーダーに任命し、時給を倍にした。「お前が四時間しか働けなくても、その内容は八時間分に値する。俺がそれを認めよう」と店長は言ってくれたそうだ。

自分の頑張りが評価される喜びを知ったフォンは、更に努力を重ねた。リーダーとして店長のサポートができるよう、周りのコミュニケーション作りにも気を配った。そうすると、フォンの笑顔と気配りが素晴らしいと、一緒に働くおばちゃん達から沢山の差し入れが届くようになった。フォンは、「笑顔と気配り」がこんなに自分の評価を上げるものなのか、と驚きながらも、誰に対してもそれを実践するようにした。何よりも、外国人の自分にこんなに優しくしてくれる人達の心が嬉しく、おばちゃん達が作ってくれるおかずは胸に染みた。

時給が増えたことにより、次年度の学費を納入できたフォンは、自分で自分の人生を切り開いていける自信がついた。日本人と同じような就職をするためには、まずは日本の大学を卒業しなければならない。大学の学費は国立大学が安いと聞いたが、それより、私立大学で成績がよければ学費免除になることを知ったフォンは、がむしゃらに勉強し、全額奨学金が支給される大学の入学を勝ち取った。成績をキープしさえすれば学費の心配をしなくても良い。日本語学校で次年度分の学費に苦労したフォンにとっては、勉強の努力など造作もないことだった。

更に、フォンの入試成績が優秀だったため、大学側から毎月五万円の援助金が支給されることも決まった。すでにアルバイトで生活を賄うことができていたフォンは、この援助金を四年間、手を付けずに貯金し、母親にプレゼントしようと思った。その貯金は四年間で二四〇万円になっており、卒業式当日にベトナムの母親宛てに送金した。「円」は、ベトナムではその価値が四倍以上になる。母親はそのお金で家を建て直したそうだ。

フォンは大学三年になった時、一流企業を目指した。「東京には一流大学に入学しているベトナム人の留学生が沢山いる。でも、少しでもチャンスがあるなら、僕も一流企業を目指したい！」と言うフォンに、私はお辞儀の仕方を教えた。誰よりも綺麗なお辞儀ができると、必ず面接官の目に留まるはず、と助言した。そして何度も何度も一連の所作を繰り返し指導し、美しい立ち振る舞いを教えた。フォンは礼儀とマナーが自分にとっての武

器になることを知り、茶道や禅の知識も取り込み、東京での面接試験に備えた。

一次試験では二百人が五十人に選抜され、フォンは見事に通過した。その後も順調に選抜され、なんと最終面接に残った。

最終面接では、「君が好きなことわざはありますか？」と聞かれ、フォンは「鶏口となるも牛後となるなかれ」と答えたそうだ。これは私がフォンに教えたことわざだ。大学進学時、フォンは国立大学に進学するか、全額奨学金が出る私立大学を選ぶか、で迷っていた。そこで私はこのことわざを引用し、私立大学を選びトップになることにも意味がある、と助言したのだ。面接官に、このことわざの経緯を聞かれると、フォンは、「日本語学校の先生に教えてもらいました。国立大学で下の方に数えられるより、奨学金が出る私立大学でトップになれ、と助言してもらいました。なので、東京の有名大学の学生より、地方私立大学で一番の自分に自信があります！」と答えたとのこと。この答えに面接官は大いに頷いていた、とはフォンの後日談。この答えが効いたかどうかはわからないが、フォンは見事に一流企業の内定を勝ち取った。

入社してすぐ、フォンは営業部に配属された。この会社では営業成績がボーナスに大きく反映することを知ったフォンは、持てる力を総動員してトップを目指した。フォンの営業成績は、一年目から大きな成果を上げた。

次の年の年末、フォンからの連絡が忘れられない。

「先生、僕の売り上げ、トップグループに入ったよ。ボーナスは七桁を超えた！　僕が日本の営業マンに負けるわけがない。全身全霊の姿勢はアルバイト先の店長から学んだし、礼儀とマナーは先生から教えてもらった。これらは全て僕の営業成績にプラスされ、給料に直結する。店長と先生が居てくれたからこそ、僕はここでトップグループに入れた！　本当に二人には感謝してるよ。それに僕が頑張れば、一度のボーナスで甥や姪を日本留学させることができる。兄たちの子供は僕が全員、留学させてやる。そして、ゆくゆくはホーチミンにビルを買って、母と兄たちに恩返しする！」とフォンは言った。

そして二〇二〇年に、それは本当に実現した。フォンは自分が貯めたお金と企業から借りた住宅資金で、ホーチミンにビルを購入したのだ。現在、フォンの家族は不動産収入で暮らせるほどだという。最初に日本に来て、自国の通貨「ドン」に落胆したフォンだったが、今度は日本で稼いだ「円」で故郷に錦を飾り、母親と兄たちに恩返しをすることができた。その頑張りは、誰の目から見ても賞賛に値する。

私がフォンと過ごしたのは、日本語学校時代の二年間だけ。それでもフォンは私のことを恩師と言ってくれ、いまだに連絡をくれる。それは多分、最初にお世話になったアルバイト先の店長にも。きっと自分を応援してくれた沢山の人にも、フォンは連絡をしていると思う。フォンほど義理がたい外国人は居ない。

フォンは問題が起こるたび一生懸命自分で考え、必死に努力しながら道を切り開いていった。そして自分ではどうしようもできない時は、素直に「人」に頼り、「人」から学んでいった。私はそんなフォンに力を貸せることが嬉しかったし、何よりフォンと共に一緒に喜んだり、泣いたりしたことこそが、教師としての生きがいだった。私こそフォンから学ばせてもらっていたのだ、と今更ながらに思う。

成功の秘訣は誰の足元にもある。全身全霊の姿勢、笑顔と気配り、礼儀とマナー、これらで成功はつかみ取れる。それをフォンは実践し、その成功を見せてくれた。フォンの成功は、これからの留学生にとって大きな励みとなるに違いない。これからも、このフォンの話を沢山の留学生に伝えていこうと心に決めている。